JISS

The Japan Institute of Scandinavian Studies

スウェーデン社会研究会報

No. 314
2000/3

発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1（株）科学新聞社内5階　TEL03（5776）1835／FAX03（5776）1836
発行人　松元さぎり　Publisher&Editor Sagiri Matsumoto　　編集責任者　岡沢憲芙　Editor in Chief Norio Okazawa
デザイン　ワンパイワンステイション　　印刷所　東友印刷　　2000年3月25日発行　　No. 314

Photo 中嶋千絵（dill com）

JISS講演会　Living in North Country スウェーデン北部暮らし／スウェーデン社会研究所とスウェーデン学の新路線／視察団のおもいで／分離か統合か―スウェーデンにおける統合問題の概要／Sweden A to Z　Vol.1　スウェーデン ア・ラ・カルト／瑞典的日常〈2〉／MUSIC／MOVIE／インフォメーション

JISS講演会 Living in North Country

スウェーデン北部暮らし

中島　優　Ms. Yutaka Nakajima

スウェーデン北部ÖstersundのMitthögskolan（日本人初）にFreemoverとして留学し、心理学を1年間専攻。極寒氷点下30度での生活、スウェーデン人とはなどこれからスウェーデン留学を希望している方々には大変興味深い笑いの絶えないなごやかで楽しくまた参考になる講演会となりました。

講演者　中島優氏

◆留学のいきさつと大学での体験

イギリス語学留学中に多数のスウェーデン人と出会いスウェーデンに興味を持つ。それ以来、スウェーデンをたびたび訪れスウェーデン留学を真剣に考える様になる。

Freemoverとは、スウェーデンへ留学する際の外国人留学生制度の1つである。1つは、交換留学生で、これはお互いの大学が提携している場合である。そしてFreemoverとは、スウェーデン人の学生と同じ条件で、スウェーデン人と同じシステムで入学を審査される場合の呼び名である。すなわち、自分で直接大学に願書を出し何を専攻したいのか、またどうしてかなど大学に申請する。ゆえに授業料も無料である。留学生に対しては、又、マスターコースの生徒には英語で授業が受けられるはずであったが、日本で（当研究所）1年間スウェーデン語を学んでいたことと、願書などをスウェーデン語で書いていた為か、その時点で合格となりスウェーデン語で授業を受けることになってしまった。最初は戸惑っていたが、結局は自分の成長の為によかった。

誰でも自分の生まれ育った環境を離れることで様々な経験をする。ましてや遠く日本を離れる事で、国内では味わえない異文化を体験する事になる。私の大学では、留学生1人につきコーディネーターが1人つく。彼らは、インターナショナル・コミッティーというボランティアの学生で運営されている。留学生にとって異文化への対応はほんの些細な日常生活でも最初は戸惑うことが多いものだ。彼らコーディネーターは、Ostersundについてから学校までの送迎や全ての生活の（どこで何を買えばいいのか？など些細な事から）ケアをしてくれるのでとても助かる。彼らの助けなしでは過ごせなかったであろう。お勧めしたいのは、留学生に対してフォローしてくれる制度のある大学を選ぶことがポイント。

大学はフランクな雰囲気である（つまり日本とは正反対）。先生は授業中机に座ったり、お互いにファーストネームで呼び合うことが心地よい。授業は一方的に聞くばかりではなく授業中生徒は何度も先生に質問を浴びせる。授業はグループワークが多く必ず3—4人で集まり考え議論し発表する。

最初の試験は授業が始まってから2ヶ月後の事であった。日本での試験はたいてい1時間かそこらなので掲示板に「5時間」と書いてありとても驚いたことを覚えている。一体どんなものかと不安を胸に教室に入るとスウェーデン人の生徒がリラックスして座っているではないか。そして各自の机の上には果物、お菓子などが置いてある。（スウェーデン人はみんな用意していた）。ふたをあけてみると試験問題は2時間もあれば解けるようなもの。なぜ5時間かというのは考える時間を与える意味で大幅な時間をとっていたわけである。日本では考えられないことであった。自分の考えをまとめ、自分のペースで進められるシステムは快適である。そしてもう1つあげると、授業中すぐFikaという言葉がでてくる。最初は何のことであるか分からずにいたが、Fikaとはコーヒーブレイクのことであった。90分の授業の後には必ずFikaタイムが待っている。スウェーデン人にとってFikaは日常生活において欠かせない事の1つである。

◆北部Östersundならではのこと

Östersundはストックホルムから北へ600km離れている。人口約6万人であり、大学にはドイツ人の留学生が主に、他にも様々な国から約40名学びに来ていた。ほとんどの留学生はスウェーデンに来たのは初めて、スウェーデン語はあまり話せないという環境。彼らとは主に英語で会話をしていた。私は日本の大学で「外国人の異文化への適応」というテーマで卒業論文を書いたことがあるが、自分自身、今回の留学で実体験出来て良い機会であった。個人的な意見として、欧米人は個人主義で自分をアピールするセンスにたけているが、日本人は恥の文化を持っているせいか、自分というものを強く相手にアピールする術を身につけるのにはじめは苦労することと思う。

北部スウェーデンだからこそ味わえた異文化体験としては、まず日照問題における精神面への影響であろう。Östersundでの最悪の時期は、11時に明るくなり2時には薄暗くなる。毎年経験しているスウェーデン人でさえも鬱状態に陥るほどである。特にスペイン、イタリアなど太陽がさんさんと降り注ぐ南ヨーロッパからの留学生にとっては、体がだるくなったり、不眠症になったりと精神・体力面でもの凄い狂いを生じる。この厳しい自然条件を十分考慮にいれ前もってフォローすることを薦める「夏と冬ではスウェーデン人の人格は違う」とはよく言われることだ。

白夜の時期になるとまた対応が難しい。本来なら深夜の2時であるのに空はうっすら明るく日の出は5時に始まる。はっきりした暗闇ではなく日本の夏の夕方のような状態が続くのだ。

留学の目的は個人によって異なると思うが、それが何であるにせよ得られるものは大きいと感じるので、躊躇している人は思い切って足を踏み出して欲しい、というのが私からの一言である。また、これからスウェーデン留学を考えている方は、スウェーデンはインターネットがとても普及していて大多数の学校についての詳細はインターネットから得られるので、ぜひアクセスして情報収集することを勧めたい。

（本稿は2月25日に行われた講演会の資料から編集されたものです）

＊当事務局でもスウェーデン留学経験ありのスタッフが簡単なガイダンスなどを行っているので質問などある方は事務局まで手紙（返信を希望の場合は80円切手同封）またはメールでお問合わせ下さい。お電話でのお問合せは一切受付けておりません。

Gillar den svenska modellen av undervisning

講演者中島氏が現地の新聞に掲載された▲

A New Route of Swedish Studies and JISS

スウェーデン社会研究所とスウェーデン学の新路線

慶応義塾大学名誉教授　庭田　範秋　Mr. Noriaki Niwata

冒頭から私事に及んで恐縮であるが、私が大学予科1年（旧制大学では予科3年・学部3年）の夏に原爆が広島・長崎に落とされたあげくに、かの昭和天皇による玉音放送となって、“終戦”と格好をとって呼ばれるものの“敗戦”となった。戦中はもとより酷かったが、戦後とてそれに敗けない悲惨な生活が待っていて、社会人心は荒廃の極みで、労働運動や社会運動は過激そのものであった。それは社会革命にも通じかねなかった。社会不安の域を通り越して、社会転覆もありえそうなほどだったのである。そのような国状、国情にあって、時の政府は歴代真っ先に国民の生活安定を目指し、生活不安の除去・解消・克服に全力を傾けた。

そこにイギリスでの社会保障に関するベバリッジ報告と提案が伝えられ、国民は「なにがなんでも社会保障の創設と発足を！」と要望しだし、アメリカ、具体的には日本占領軍マッカーサー指令部もこれを強力に支援し、そのような国を挙げての風潮の中に、さらに“福祉国家スウェーデン”の政策ならびにその成果が報じられ、スウェーデンの福祉と保障の実状こそ、わが日本国の手本にして理想であるとされたのであった。

私は故松本浩太郎先生にお声を掛けていただき、高須裕三先生に誘われもし、その後故平田冨太郎先生をチーフに戴く当スウェーデン社会研究所の会員となり、後日理事にも選ばれて今日に至っているのである。この間に多くの先輩と先生方にお近付きをえて、何よりもスウェーデンの社会と経済、そこでの福祉の思想と社会保障の政策を学びえて、学的視野をひとまわり広げることができた点で、この上ない幸せと充足を感じえたのであった。ここまでの歩みの中でスウェーデンの社会保障に関する報告もさせてもらったし、また“スウェーデン社会研究月報”には数度書かせていただいて、有益な勉強をした。スウェーデン社会研究所編「スウェーデンの社会政策」（昭和56年12月、成文堂）の発行に際しては、「第5章・社会保険政策ー新しい生活保障の形成に向けてー」を書き上げて収録・掲載をえたことは、いまだに喜びと思い出されるところである。また同研究所の財政強化に向けていくつかの企業や研究団体に支援の依頼をし、ほんの少しではあるが経営・運営面でもお役に立てたのではないかと思い、今ここに新事務所への移転を機に業務と人員の刷新によって研究体制の充実、そしてミレニアムを契機により以上の発展に一層の努力開始と聞くにつけ、改めて喜びの満つるものがあるのである。

私はスウェーデンの学理と実際を学ぶに際し、次のような把握の仕方をしているのである。アメリカそして日本占領軍当局がイギリスやスウェーデンの福祉と保障を例にとって、「日本も福祉政策・社会保障に励むべし。しかして費用を出し渋ってはならぬ」と、ほとんど強制に近い政策展開を求めたことは、実は敗戦後にいよいよ始まる。戦後の国際間経済戦争に際しての“競争条件の均等・平等”を達成すべく仕組んだ一面があるとも把握した。もとよりそのこと以前に、日本の国内平和と生活安定を達成せんとする“より大乗的にして高次元”の政策目的があったことは、絶対に忘れえないというところである。

ガムラスタン

次いで私はこうも思う。なにせスウェーデンと日本とでは国状も国勢も、自然条件も国際環境も、人種も歴史も、その他もろもろの点であまりに違いすぎる。そこでスウェーデンが国内で採用し、実践し、展開に努めている具体的経済政策そのものは、よしんばいかに魅力的であったとしても、それをそっくりそのまま日本に導入し、適用し、活用し、遂行することは、必ずしも得策でなく、いささか無理や矛盾も生ずるであろう。むしろここはまずスウェーデンの福祉と保障の理想・理念を十分に理解し、それへ向けての情熱と意欲を探究・研究して、そしてそれに日本なりの条件を反映させ、加味または改良、修正しつつ、そこで初めて実行に移しうるとするのである。いかんせん、わが日本は結局は敗戦経験国であり、資源不足、人口過密、さらに国際環境の厳しい国なのであるから、しかも今またバブル経済崩壊と金融危機に見舞われているのであるから。

合計特殊出生率の低下では、日本とスウェーデンはやや条件を同じくする。いわゆる少子高齢化に苦しむわけで、年金制度と医療保険の財政窮迫とその政策に関しては、われわれは先例としてのスウェーデンから大いに学ばなければならない。スウェーデンもいささか福祉政策の行き過ぎとそこからの発生問題に、手を焼いているのではなかろうか。EUいよいよ発足の中で、福祉政策の徐々なる後退を検討とのまことに悲しい噂も流

れてきているわけである。税金と社会保障費用の負担合計の重さが国民の労働意欲を削りつつあるとか、十分すぎる救助・救済・扶養・扶助で予期せざる社会的歪みを生み出したなどとも伝わってきた。良い点でも、弊害の点でも、われわれはスウェーデンから学ぶべく、目を離すことはできない。これこそがミレニアム・新世紀の福祉に向けての最善の政策路線とされると信ずる。

Memories of Inspect

視察団のおもいで

日本大学名誉教授　内藤　英憲　Mr. Hidenori Naito

スウェーデン社会研究所は、さまざまな活動を通じて、日瑞の友好、相互理解の絆となってきたが、その活動のひとつに視察団の派遣があげられよう。私のスウェーデン訪問はここ30年間に、長期、短期あわせて12回ほどであるが、そのうち3回はスウェーデン社会研究所主催の視察団にかかわるものであった。ここではとくに印象深い「第3回福祉社会の流通・生協視察調査団」1976年8月15日－8月29日の視察団について書きたい。当時の記録によれば、参加メンバーは、高橋正雄九州大学名誉教授等の学者6名、樋口久雄全農生活部長等協同組合関係者11名、その他3名の合計20名。

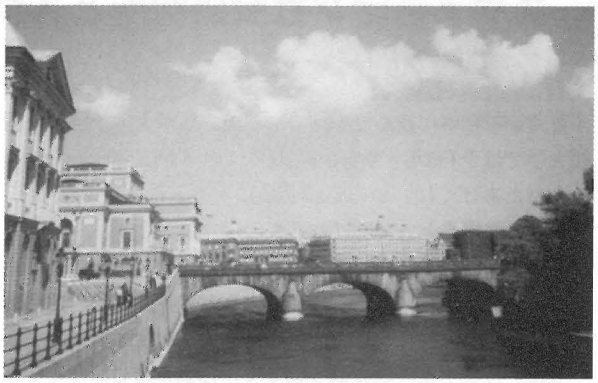
また訪問先は、ストックホルムでは、協同組合大学、消費者協同組合本部、テスト・キッチン、ハイパーマーケットのオブス、シャーホルメンの老人ホーム、デパートのNK、ボランタリーチェーンのICA、ハンディキャップ少年の学校、住宅協同組合、消費者庁、農協、スウェーディッシュ・インスティチュートなど。その他、コペンハーゲン、ハンブルグ、パリ、イギリス各都市を訪問した。

以上、ストックホルム以外の諸都市も含まれているが、流通・生協視察団という立場から、スウェーデンとの比較の意味で入っているわけで、スウェーデンがメインであることは当然である。

これら視察結果の詳細については、スウェーデン社会研究月報のVol. 8 No.11およびNo.12において、私とともにコーディネーターを務めた福田・日大講師（当時）の報告その他の記事がある。しかし私がここで書きたいのは、そのことではなく、私個人のこの旅行との関連における私事である。

そもそもこの視察団への参加は、当初から私が同道するのではなく、ストックホルムにおいて、団員を迎え、コーディネーターとしての仕事を務め、旅行の解散地ロンドンまで団員と同行するというものであった。というのは、私はその年の7月始めから12月いっぱいストックホルム大学の客員研究員であったからである。視察団のテーマが、当時の私のテーマ『スウェーデン小売業の研究』に合致していたし、私は喜んでコーディネーターを引受け、視察団の訪問先をさきに全てひと廻りして受入れの準備をしていたのであった。

いよいよ視察団の到着の8月21日、私は朝から体調が悪かった、例の持病の胆石である。夕方アーランダ空港まで迎えに行かなければならない。私は居をアパートから、団員の宿泊先であるコンチネンタルホテルに移した。食事をしてから空港に行こうと思って、食堂に行きコンチネンタル得意のステーキを注文した。運ばれてきた巨大なステーキと山盛りのサラダをみて、具合が悪いのにつまらないものを注文したと



ストックホルム

後悔した。トテモ喰えそうにない。大部分を残して、空港行きのバスに乗った。もう1人のコーディネーター福田氏をはじめ、全員がやがて到着した。添乗員の三堀氏に聞くと、食事はまだだという。そしてホテルで夜遅くとることになっているという。何時ごろからだったか忘れたがかなり遅い時間から夕食会がはじまった。私は来てくれたストックホルム在住の菊地幸子文京大学教授、ベック・ヴァル・ストックホルム大学教授、明日からの通訳をお願いする高橋たか子女史を団員の皆さんに紹介したが、目の前にならんだゴチソウには、全然食欲がわかなかった。お義理で若干をつまんだ程度だった。

その夜就寝してから、果たして恐れていた胆石の発作がはじまった。激しい吐気と胃の激痛である。やむなく翌日からの視察団のリーダー役を福田氏と菊地氏にお願いした。朝になるとホテルから頼まれた医師がきて診察してくれた。しかし入院すべきだという。私は国内でも乗ったことがない救急車に乗せられてペーパーペーパーと病院に連れられた。病院は市庁舎の近くの病院だという。

いままで私は福祉国家スウェーデンの病院を何度か見学した。いずれもピカピカの立派な病院だとさすがに感心させられたものである。しかし、私が連れられた病院はクスンだ古ぼけた病院で、ベッドも毛布も古く立派とはいえない。要は外国からの見学者にはよいところをみせるのであろう。

しばらく寝かされていると、親切そうな女医がやってきた。診断することなく、全て検査が先であった。丁度簡単な人間ドックのようで、日本とは感じが違っていた。丸1日くらいたったところで、検査の結果をもって例の女医があらわれて、診断をしてくれた。いまのところ重大な病気はなく、仕事に戻ってよいという。幸い私の胆石の発作も治まっていた。（私の場合発作は大抵1日で終わるのが常である）。私はやがてホテルに帰った。ただこれだけのことであるが、いくつかの教

訓を得たように思う。

第1には、福祉国家スウェーデンの病院も、見学者が見せられるようなピカピカの病院ばかりではないということ。

第2には、スウェーデンの担当医は親切であり、かつ、科学的な検査を重視していること、また外国人に対しても費用をとらないこと。私の場合はホテルの医師の診断によって、消化剤を薬局で求めた20クローナが全ての支出であった。

第3には、外国で病気になったとき、外国語で症状を訴えることができず困ったこと。私の場合は自分の胆石症を知っていながら、gallstoneという言葉も知らなかった。ただ視察団に加わっていた交通公社のベテラン添乗員三堀氏は、さすがにこういう場合の英語も堪能で大いに助かった。

以上、団員の方々には、ご迷惑をかけた視察旅行ではあったが、また病気の話で恐縮であったが、余りに苦しい旅であったので、かえっておもいでとして、強く印象に残っているわけで、ここに一筆した次第である。

Sweden: Towards an Integrated Society

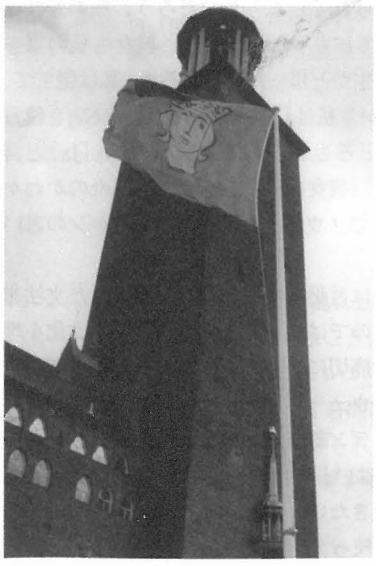
分離か統合か ― スウェーデンにおける統合問題の概要

(社)スウェーデン社会研究所、中部日本スウェーデン協会会員　兼松　麻紀子　Ms. Makiko Kanematsu

近年スウェーデンの社会政策は「統合」(integration) を重点課題に動いている。外国からの移民 (invandrare) はもはや周辺的な存在ではなくスウェーデンの一部として社会に貢献しているが、ここ20年ほどの間に「分離」(segregation)、特に経済格差による社会的及び民族的分離が顕著になった。社会に帰属感を持てない人の増加や、分離された者同士の無関心や反感は、民主主義の原則を根底から覆すことにもなりかねない。時に悪質な犯罪として現れる人種差別や外国人排斥の傾向などへの懸念もある。そのようなことから統合は、スウェーデン社会の将来がかかった重要問題ととらえられているのだ。この分離と統合の周辺を、ごく簡単になるが紹介したいと思う。それに先立って留意点として挙げておきたいのは、「移民」という語についてである。これは背景も立場も全く異なる人々の総称であり、また、ときとして「スウェーデン人」と相容れない集団であるかのような印象を与えるため、簡単でない問題を含んでいる。最近では「新しいスウェーデン人」(nya svenskar) という語も使われている。また、以下で扱う「移民」は当然、統計上移民とされる人々全てを含むのではない。

それではまず、分離の現状と指摘されている問題点を概観してみたい。

外国から移住してきた人々は、本来なら数年後には「移民」ではなく社会の構成員であるはずだ。しかし、現状では民族の境界が社会経済的な境界になってしまっている傾向が強い。これに対して、社会福祉制度が移民を福祉の対象として分類したため、移民に受け身的な役割を固定してしまったのだ、という指摘がなされている。



ストックホルム市庁舎

経済状態の悪化で失業率が上昇している昨今では、移民が職を得ることが難しくなった。労働市場に移民が参加できないことが、より深刻な社会経済的分離を招くと危惧されている。高学歴で言語にも不自由しない移民（あるいはその子供）でも、外国風の名前だと就職活動で面接に呼ばれない、という就職差別も珍しくない。

スカンセンでのバルボリ祭

また、移民の急増した1960－70年代は、都市郊外に団地の林立した「100万戸計画」の時代でもあった。移民は、この新しい団地に住居を割り当てられることが多かった。現在では人口に占める移民の割合がスウェーデン人より高い地区もある。そのような地区は社会的環境の悪化や貧困といったネガティヴなイメージを集めるに至った。その一方で、ほとんど移民らしき人を見かけない地区もある。このような居住地分離は、分離を象徴するものだ。

その他にも分離の側面にはいろいろあるが、今度は公的機関のとっている主な対策について述べ、スウェーデンの目指す社会の方向性を探りたい。

男女間の平等問題において、まず制度面から改革が進められていったように、この問題でも国や公的機関の主導が目立つ。1998年には統合局 (Integrationsverket) が設置され、「移民政策」から「統合政策」への転換が明示された。そこでは移民を特別な需要のある一つのグループと見なすことをやめ、全ての人が民族に拘わらず同じ権利と可能性を持つことを目指す、と強調されている。統合担当大臣は文化省におかれている。

労働市場での民族差別を禁止する法律は、差別オンブズマン (DO) に関する法律と共に昨年強化された (SFSnr 1999：130；131)。この法律の目的は職場における民族的多様性であり、労働、雇用条件、労働条件、昇進可能性において帰属民族に関係なく同等の権利と機会均等を促進することである。

自治体では、例えばストックホルム市は1997年に議会で統合プログラムを採択し、「社会的・民族的分離の進行をくい止める世界初の都市になる」と宣言した。そして企業や公的機関と連携し、サービス、教育、就労などにおいて全市民の平等を目指すとしている。

外国人排斥傾向については、政府も国会に議席を持つ諸政党も共にことの深刻さを認識して対策を進めている。反人種差別の行動計画を作ることも政府によって確認された（2000年1月18日の国会）。

最大野党である穏健党は1999年、分離対策案レポートの中で、危機感と改善への熱意という点ではほぼ政府と見解を同じくしながらも、福祉制度のあり方と個人の責任を巡って社民党の統合担当大臣（Ulrica Messing）と対立した。

統合の成否は、スウェーデン社会の将来を直接左右するだろう。今後、人々の意識変革を含め、社会の各レベルでこの問題がどのように展開していくか、注目に値する。

Sweden A to Z Vol.1
スウェーデン　ア・ラ・カルト

東海大学北欧文学科非常勤講師　速水　望　Ms. Nagame Hayami

スウェーデン人は「Ja（はい）」と「Nej（いいえ）」をはっきりと使いわけ、表現が直接的である—これは私が受けたスウェーデン人の印象である。それに対して日本人は婉曲的な表現を好むように見られる。「はい」とか「いいえ」をハッキリいってしまったら何か後ろめたい気持ちになる人も多いのではないだろうか。スウェーデン語においてはさらに「Jo（否定に対する肯定の答え）」というユニークな返事の副詞がある。

スウェーデン語では肯定に対する肯定の答え、肯定に対する否定の答え、否定に対する否定の答え、否定に対する肯定の答えを使い分ける。例えば真っ赤なりんごを指して「これは真っ赤なりんごですよね」、と問われれば「はい（Ja）」で答える。次に、「このりんごは黄色ですよね」の質問に対しては「いいえ（Nej）」で答える。さらに「これは黄色いりんごではありませんよね」と聞かれれば、やはり「いいえ（Nej）」で答える。最後に「このりんごは真っ赤なりんごではありませんよね」と聞かれれば日本語では「はい、それは真っ赤なりんごです」と言ってしまうところだが、スウェーデン語においては否定に対する肯定の答えの「はい（Jo）」という言葉で答えなければならない。頭の中では理解できても実践ではなかなか難しいこのJa，Nej，Joをある体験を通じて身をもって学ぶことができたのでそのエピソードをここに紹介したい。

まだ留学が始まって1ヶ月にも満たない頃だった。私が履修していたコースというのは日本で言うなら国文科のようなところで母国語の教師やジャーナリストを目指す人の集まりであった。そんな中で日本から来たばかりの私が「はいそうですか」といって、授業に入っていくことは非常に困難なことであったが、私は他の学生と比べて自分が劣っているとかあまり気にしておらず、むしろハードルが高ければ飛び甲斐があるとさえ思っていた。そんなある日、将来の事を考えはじめて文学部の指導教員の元を訪ねた。彼女はスウェーデン人には珍しく小柄な人で感情的になるのが想像もつかないような優雅な雰囲気を持つ女性であった。彼女の部屋には飼い犬のヨークシャテリアが昼寝をしていたのを覚えている。

「これからの事なんですが…」と切り出した私に澄んだ青い目が一瞬私を冷たく凝視しその穏やかな様子からは想像もつかないような言葉が次から次へと飛び出した。「これからの事って今やってることも出来ないのよ」「あなたには出来ないのよ」「単位をとろうとするから間違っているのよ」心底彼女は無謀な私に対して怒っていたのかもしれない。

私は呆然とした。何と言葉を続けたらよいのか分からなかった。しかし私は何故かとっさに相手の怒りを鎮めなければならないと思った。今考えてみると彼女は別に怒っていたのではなくて日本語より表現が直接的なスウェーデン語で自分の思うことをそのまま口に出していただけだと思う。相手の怒りを鎮めるのにもっともいいのはとにかく「貴方のおっしゃるのはもっともです」という相手の言い分も十分理解しているという姿勢を見せてから、無理を承知で頑張りたい、という自分の思いを伝えようと思った。彼女は私にこういった。「貴方には全く出来ないことなんだから」心の中ではそんなことは無いと思いながらも、怒りを鎮めて欲しいという理由から「はい」と答えた。すると彼女は同じ質問をもう一度くり返した。私はまた「はい」と答えたのだがその時はっとあることに気がついた。私は彼女に「貴方には全く無理なことなんだから」と言われたとき、「あなたの言うことはもっともですが…」という方向に話を持っていきたかったのだったら「Ja」ではなく「Nej」で答えるべきだったのである。実際私は「Jo」ではなく「Ja」と答えたのだが、それはスウェーデン人にとっては同じようにとれたのかもしれない。

私が「Ja」と答えることによって彼女には私の本性をさらけだす、つまり「貴方は私に全くだめだというが、そんな事はない」という意味にとられてしまったのだろう。しかも私は2回も「はい」と言ってしまったのだから、彼女も私の事をなんて強情な日本人学生だと思ったことだろう。私は慌てて、「失礼しました、すっかり私は日本語の感覚でJaとNejを使ってしまいました」としどろもどろになりながら私が「Ja」と言った理由を説明したが、彼女はその意味がわかったのかわからなかったのか、「ここはスウェーデン、スウェーデンの言い方をして」と言われた。

この経験を通じて私は言葉を学ぶということはただ文法書から得た知識を増やすのではなく、それを包括する文化を理解し学ぶことであると痛切に思った。この記事を読んで下さった方の中にも現在スウェーデン語を勉強されている方もいると思うが、スウェーデン語で返答する時はまず、どんな些細な質問に対しても「はい」か「いいえ」のどちらかで答えられるように心掛けて頂きたいと思う。そして是非ともこの三つを間違えないように使って頂きたい。

What a wonderful Swedish life!

瑞典的日常 (2)

熊谷　深雪 Ms. Miyuki Kumagai

季節の移り変わりにかなり鈍感になってしまった私たちでも、暮れの慌しさから解放されるお正月あたりから、なんとなく晴れがましい気分になったりするものだ。気のせいかしら、と思っているうちにカレンダーに立春の文字を見てなるほど、と気がつく。

人間だって自然の一部。新しい生命の芽生える季節の訪れに無意識の内に同調して心がはずんでしまったって、ちっともフシギじゃない。

外は肌を刺すような冷たい風が吹いていても、水仙や梅の薫りに春の確かな足どりを感じとり、桃の花がほころんで、水ぬるむ頃になれば、もうアッという間に桜が咲いてポカポカした陽気になる…と、ここまでは日本のお話。スウェーデンではクリスマスが終わって、年が明けても、まだまだ寒い冬が残っている。

冬至を過ぎると陽はどんどん長くなる、と理屈ではわかっていても、相変わらず空はどんよりと薄暗いし、雪はしぶとく地面にはりついていて、やっと解けはじめたかナ、と思ったら、またドッカリと空から降ってきて、私たちをぬか喜びさせる。

日本の春が“徐々”に“確実”にやってくるのに対して、スウェーデンは“突然”春になっちゃった、という感じである。そして私たちが「えーっ？」とまごついている間に夏になってしまう。

こうも季節の移り変わり方が違うと、人格の形成になんらかの影響をおよぼしているんだろうなあと思う。(まだ確かめたわけじゃないけれど。)

冬の間、わずか数時間の“昼間”のうちに、人々はよほどの悪天候でもない限り、散歩をする。まだ歩けない小さな子供は乳母車、あるいはそりに乗せられて外出する。スウェーデン人は寒さに強いから、こういう事が平気でできるんだ、と以前は思っていたが、スウェーデン人だって寒いものは寒い。だから、その人の体力にあわせて、5分でも、10分でも外にいようとする。それもこれも全ては、少しでも日光にあたろうとする彼らの“努力”なのである。

いよいよ春分の日も過ぎて、夏至に向かって急激に陽がのびる時期となった。

寒風をいとわず外で日光浴する人々がこの季節のスウェーデンの“風物詩”である。

MUSIC SWEDISH CULTURE

スウェディッシュ・ポップ・ミュージック紹介
〈第2回〉ソフィー・セルマーニ

待望のニューアルバム、4月リリース決定

ESCA8136
価格：2,520円（税込）
2000.4.19リリース

4歳の頃から作詞をはじめ、16歳で作曲をはじめたというスウェーデンの女性アーチスト、ソフィー・セルマーニのニューアルバムが、この春日本でも発売される。

'95年のデビューアルバム『ソフィー・セルマーニ』、'98年の『プレシャス・バーデン』に続くこのアルバムは彼女の3枚目の作品となるもの。アルバムタイトルは『タイム・トゥ・キル』。本国スウェーデンでは、一足早く昨年11月にリリースされ、このアルバムでソフィーはスウェーデンのグラミー賞最優秀女性ポップ・ロック・ヴォーカリストにノミネートされた。そして今回、日本では4月19日にアルバム・リリースが決定。

レコーディングはトローサ群島にある島で昨年夏に行われた。その時の様子をソフィーはこう語る「バンドのメンバー全員でいっしょに生活しながらレコーディングしたの。真夏の8月で、天気もすばらしくて、合間に海で泳いだりして…」。そして、アルバム4曲目にも収められているタイトル曲『タイム・トゥ・キル』は、スウェーデンではシングルとして先行リリースされた曲でもある。

ETTA betyder ETT（エッタの意味はエット）

昨年4月、愛娘エッタを出産し、ママになったソフィー。Etta(エッタ)という名前は、スウェーデン語で“1”を表すEtt(エット)からつけられた。アルバム1曲目に収められている「My(マイ)」はエッタのことを歌った曲。「彼女が生まれる1ヶ月前くらいに家で書いたの。子供に対する愛情って限りがないのね。それと同時に、愛しているから心配もどんどんふくらんでいく。そんな気持ち。」とソフィーは語る。

プロデューサーはラーシュ・ハラピ

サウンド的な面では「相変わらずボブ・ディランを聴いているし、ラーシュと一緒に作ったアルバムであることに変わりはないわ」とのこと。プロデューサーはデビュー当時からの音楽パートナー、ラーシュ・ハラピ。シンプルで切ない旋律。どこか懐かしくて、でも絶対に他にはないアコースティックなサウンド。そして、研ぎすまされた言葉の数々。ここには、ソフィーのリアルな感情がそのまま言葉とメロディに変えられた曲の数々が収められている。

このアルバムの12曲目には日本盤のみのボーナストラック「モースト・インコンヴィニエント・タイム」も収録され、さらにCDエキストラとして「タイム・トゥ・キル」のビデオ・クリップも収録。なお、このアルバムに関しての詳しいお問い合わせ先は、EPIC・インターナショナル 村上まで。(Tel.03-3475-7281 ホームページアドレス：http://www.sonymusic.co.jp)

Movie

年間観客動員数NO.1！「ショー・ミー・ラブ」今春公開。

スウェーデン本国で「タイタニック」を超える記録的大ヒットとなった「ショー・ミー・ラヴ」（原題:FUCKING　ÅMÅL）が日本でもBunkamuraル・シネマにて公開されます。昨年夏、フォリナーやロビンによるテーマ曲が本国で流れていた記憶も新しいところ。監督はMalmö出身のLukas　Moodysson。劇場窓口にて前売り券をお買い求めの方に、特製オリジナルポストカードをプレゼント中。なお、詳細はこちらのホームページを御覧ください。

http://www.kuzui.co.jp/showmelove/

●定員／入替制　●特別鑑賞券1500円／当日料金1800円（税込）

Books

「遺伝子組み換え食品の争点　クリティカルサイエンス3」

緑風出版刊　A5判292頁
2,200円＋税
ISBN4-8461-0001-4
2000年2月刊

知らぬ間に遺伝子組み換え食品が食卓に進出してきている。導入の是非や表示の問題点、安全性や人体・環境への影響を、最新のデータで分析

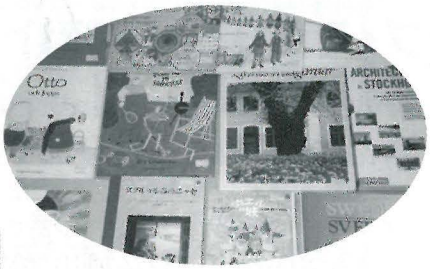
「大変なんです！でも最高に面白いんです」

河本佳子著　新評論刊　264頁　2,000円＋税

障害をもった患者さんへのユニークな治療・訓練と総合ケアで躍進する「作業療法士」の世界

JISS INFORMATION

SALE



◆スウェーデンブックセンターで販売していた、スウェーデンの絵本、ミステリー、ノンフィクション、小説、写真集ほかにもたくさんの書籍を当事務局で販売することになりました。（ノルウェイ、デンマーク関連書籍もあります）ご興味のある方はお問合せ下さい。

◆スウェーデンの夏至祭をメインとした写真（額付）を販売致します。全て1点限りオリジナル作品です。

22.5×30cm　4,500円

◆スウェーデン・レクサンドのSverigealmanackan社直輸入のA6サイズカレンダー。

1,500円→500円

上記とも郵送代別途にて発送も承ります。

講演会

6月6日(火)「障害児家族を中心にした医療チームを!!」

スウェーデンの画期的なリハビリプログラムと作業療法、日本人のリハビリに対しての考え方を少しずつ変えていこう、という内容を重点的にした講演会です。皆様のご参加をお待ちしております。講演は日本語で行われます。

日時：6月6日（火）18：30～21：00（コーヒーブレイクあり）
場所：スウェーデン大使館オーディトリウム
講師：マルガレータ・ニールソン氏
（スコーネ地方ハビリテーリングセンター総会長）
河本佳子氏
（マルメ大学総合病院小児科・青年ハビリテーリングセンター作業療法士）

＊追って詳細はご案内致します。

The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS
（社）スウェーデン社会研究所　事務局（松元・Matsumoto）
〒105-0013　東京都港区浜松町1-8-1（株）科学新聞社内5F
C/O Kagakushinbunsha, 1-8-1 Hamamatsucho, Minato-ku, Tokyo105-0013 Japan
TEL:03-5776-1835　FAX:03-5776-1836　E-mail:jiss99@tkg.att.ne.jp
URL http://www.sci-news.co.jp/sweden/
月曜日～土曜日（水、日、祭日休）10:30～17:30　Mon to Sat (Wed,Sun,Holiday close)